
刻印の世界～the markers dimension～

仄歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻印の世界 the markers dimension

【Nコード】

N4422P

【作者名】

仄歌

【あらすじ】

ブリーチの二次創作です。細かい人物情報は書いて無いので、ブリーチの事をよく知っている方用になります。すみません・・・一護の失った死神の力の回復から、零番隊の事についての物語です。駄作ではありますが、どうかお気を崩さぬ様、ほどほどにご閲覧下さい。

prologue (前書き)

今回からは死神の力回復篇です。とはいえ今回が初回なんです。がW
すぐにジャンプと矛盾ができると思いますが、よろしくです。

prologue

天を鎖す、その鏈。

月を斬り裂く、その刃。

一を護る、その刀。

一護は走る。空座高校の制服を着て。自身の疲れをも忘れて。

「おおーい、いっちごー！！」

啓吾が大声で叫ぼうとも振り返りもせず、ただひたすら走る。やがて、かつての十二番隊隊長、浦原喜助の経営する『浦原商店』が見えてきた。

「浦原さん！」

一護は浦原商店入り口の障子を勢いよく開け、店の奥に居る浦原を呼んだ。

「ああー、黒崎サンですか。待ってたッス、とりあえず上がって下さい。」

奥から出て来た浦原は、一護を店の中へと迎え入れた。

「お茶でも…」

「浦原さん！話は本当なのか！？俺は何をすりゃいいんだ！！」

浦原の言葉を見無視し、かなり慌てた様子で問いかけた。

「朽木サンから聞いたんスね。ええ、ホントッスよ。黒崎サンは、もう一度死神になれる。」

同時刻。尸魂界、技術開発局。

「コレは大発見だヨネム！早急に総隊長に報告だヨ！！」

「了解です、マユリ様。」

全てが、今。動き始めた。

direction and tell (前書き)

第二話です。前回で、「おいおい違ってるぜ！」ってところはしっかりと説明してありますからご安心を。では、どうかお気を崩さぬ様、ほどほどに読んでいただけると幸いです。今回は少し遅れましたが、これからはもっと投稿を速くしたいと思います。

direction and tell

「ええ、ホントっスよ。黒崎サンは、もう一度死神になれる。」

一護は藍染との戦闘で死神の力を失った。しかし浦原は、一護が再び死神になる事ができると考え、それをルキアに伝えた。浦原は現在仮面の軍勢の一人である、有昭田鉢玄によって一月浦原商店から出られない様、専用の結界を張られている為に直接教える事ができなかった。故、ルキアに一護へ伝わる様頼んだのだ。ルキアに頼んだのは他にも意味があり、他の人間に教えてしまうと必ず「危険な事を一護にはさせられない。」と言うであろうと浦原は考えたからである。そもそも一護が失った力は霊媒対質と言うところからであり、本来なら死神の力は愚かルキア等、死神を見る事さえできない筈なのだ。しかし、浦原の作った義骸を使ってルキアは一時的に人間に見られる事のできる体にした。故に一護まで情報を伝える事ができたのだ。

更に浦原は口を開いた。

「その為に黒崎サンには一度、虚になってもらいます。」

余りにも想定外な事を口にした。一護は驚きを隠せず、状況が読み取れなかった。

「何言ってるんだ浦原さん！そんな事したら浦原さん一人で止められるかどうか…」

「大丈夫っスよ。一人じゃ無いっスから。」

今度は浦原が一護の言葉を遮って言った。すると奥からテッサイが現れた。話によると、浦原は一護を一旦殺して虚化させる事で、一護を深層心理世界へ送って再び死神の力を呼び出すと言うのだ。

「黒崎サン、この話はあくまでも一か八かっス。その世界の中で何が起きるか分かりません。失敗したら今度こそ死ぬ。止めたいなら構わないっスよ。」

究極の選択を迫られた一護は、震えた手を強く握りしめながら言っ

た。

「…悪い、少し考えさせてくれねえか。」

「ありがとな。」と一言残して一護はゆっくりと浦原商店を後にした。

尸魂界。一番隊隊舎。

「日番谷隊長が不在じゃが、由を知る者はおらんか！」

山本総隊長の声が隊舎内に響いた。現在、緊急隊首会が行われているのだが、日番谷の姿が見当たらないのだ。

「確か、修業をしに行ったんじゃないか？」

「藍染との戦いで精神的にも傷を負っていた様ですし、きっと何処かで腕を磨いているのでは無いでしょうか？」

京楽、卯ノ花共に日番谷は修業をしていると言う。

「幾ら己が無力とは言え隊長が不在とは困った奴じゃの…」

総隊長はそっと溜息を零した。

「仕方が無いのう。之より、緊急隊首会を始める。今回隊長を呼び出したのは、涅隊長が戦利品として持ち帰った破面の研究材料である二人の内、一人の詳細が発覚したからである。詳細については、零番隊の席官、名は『黒崎^{くろさき} 美寒^{みかん}』である！」

再び総隊長の声が隊舎内に響き渡った。

「黒崎 美寒！？その名はまさか…」

碎蜂は黒崎 美寒を知っている様で、反射的に口が開いてしまった。

「……死神代行…」

風が、強く吹いた。

make up one's mind (前書き)

第三話です。零番隊と一護の力回復が都合上、同時に進んでしまいました。分かりにくくなると思いますが、よろしくお願いします。

make up one's mind

「……死神代行……」

碎蜂は呟いた。

「死神代行が零番隊の席官！？そんなの聞いた事無いぞ！」

それぞれが驚きを隠せない中、マユリが口を開いた。

「驚くのはまだ速いヨ！あの被験体はただの死神代行じゃア無い。一度死神の力を剥奪された上でもう一度死神の力を貰い受けた元死神の死神代行。更に、後二日もすれば……」

ボタン！とマユリが話している途中で、隊舎の扉が開いた。

「報告します。旅禍が瀨霊廷内に侵入しました！性別は男。死覇装を纏い、死神の可能性がありますが、護廷十三隊所属している様には見受けません。その男の強さは異常です。私達が束になっても勝てるかどうか……」

隠密機動の一人が緊急報告をしに、一番隊舎まで来たのだ。更に後方からもう一人、緊急報告をしに一番隊舎まで来た。

「追加報告です！その男の他に、もう一人の旅禍が瀨霊廷内に侵入しています！性別は女。その旅禍もまた、死覇装を纏い、死神だと思われます。」

「全く、忙しいわい。二番隊、六番隊、十一番隊は至急、旅禍を捕えよ！」

総隊長は杖を床に突き、声を張り上げた。

現世。空座町。

浦原商店で一護を見送った浦原は、深い溜息をついた。

「そんな簡単に帰してしもうて良かったのか、喜助。本当は死神になつて欲しいんじゃない？」

先程のやりとりを見ていた夜一は、浦原に問い掛けた。

「まあそれはそうっすけど、状況を理解させる事も大切っスから。」

大丈夫、心配しないで下さい。彼は必ず此処に來ます。覺悟を決めて。」

浦原は真剣な眼差しで夜一に言った。

「まあそもそも心配はしとらんがの。」

夜一は猫の姿となって、店の奥へと消えていった。

帰り道、一護は藍染の言っていた言葉が耳から離れなかった。

「戦いの勝利は努力の結果だと思ったか？」

「自らを肯定するに不都合な“事実”こそが悉く真実なのだ。」

（じゃあこれから先は俺自身の本当の力で：違え、それじゃまるで俺が崩玉に頼ってるみてえじゃねえか！でも次は本当に：てかそもそも俺が死神になる理由なんてねえじゃねえか！）

一護は藍染との戦いで、今までの戦いが全て藍染の思い通りに進められていたという事実を知った。以来、一護は失敗を恐れる様になつてしまったのだ。更に今回は、自らの命を賭ける為、なおさら失敗する訳にはいかない。一護は友の為、家族の為に自分は生きなければならぬ。そう思っていた。

一護はやがて、自宅であるクロサキ医院に到着し、ドアを開けた。

「お兄ちゃんお帰り！」

ドアを開けると、一護の妹である遊子出迎えた。

「おう。親父は居ねえのか？」

一護は遊子に尋ねた。

「お父さん、何か電話かかってきたらすぐどっか行っちゃって：」
「どうやら一心は不在らしい。夏梨は中学の女子フットサル部に所属している為、帰りが遅い。現在は五時二十八分。まだ夏梨は帰ってこない。勘の鋭い夏梨が居ない事に、一護は好都合とばかりに遊子に話しかけた。」

「なあ、遊子。遊子は、もし俺が帰ってこなくても、いつまでも俺を信じてくれるか？」

一護の唐突な質問に驚く遊子だったが、平然というフリをして答え

た。

「私は、いつでもお兄ちゃんを信じてるよ！だから心配しないで行って来て！！私達は大丈夫。だから…」

遊子は一護の気持ちを察した様で、一護がどこかへ行ってしまう事を悟った。そして遊子は、少し間を空けて言った。

「必ず、還って来て。」

一護は、覚悟を決めた。

make up one's mind (後書き)

あんま戦いをしないのですが、これからそういう話にもってきたい
と思います。段々複雑な話になっていきますが、なにとぞよろしく
お願いします。

there is one because (前書き)

第四話です。ちなみにフリガナありすぎて見にくいつて人の為に、オリジナルでない元からある用語にはフリガナをふっていません。あくまでもブリーチをよく知っている人用ですので：これから話がごちゃごちゃになります、よろしくです。

there is one because

「必ず、還って来て。」

一護は、覚悟を決めた。

「ありがとな。少し、上行ってる。」

一護は遊子に御礼を言い、二階にある自分の部屋に行った。

一護は部屋のベッドに寝転がった。何か嫌な予感がした。

尸魂界。

瀨霊廷の西側では、弓親と一角が旅禍を探し回っていた。

「旅禍はどこにいやがる！さっさと見つけてぶっ倒してやるぜ！！」
一角は叫んでいた。

「あんまり叫ぶと旅禍が気付いて離れて行くから程々にね、一角！」
一角に注意した弓親だったが、弓親も大きい声ではあった。

「待って、一角。旅禍だ。一氣に行くよ。」

弓親は道の先に旅禍がいる事を伝えた。

「いいや、俺一人で行く。戦いは長く楽しみたいからな。」

「分かった。じゃあ僕はもう一人の旅禍を探しに行くよ。」

「おう、じゃあな。行くぜ、正解！龍紋鬼灯丸！！」

弓親は堀へジャンプして旅禍を探しに行き、一角は攻めに入った。

「行くぜおらあー！！」

一角は龍紋鬼灯丸の斧状の刀を振り回して旅禍に斬撃を当てようとした。しかし、振り向いた旅禍が引き抜いた斬魄刀によってあっさり止められてしまった。そして一瞬にして龍紋鬼灯丸は碎かれ、旅禍は瞬歩で一角の後ろへと回った。

「くそ、やべえ…」

旅禍は躊躇せずに斬魄刀を振り上げた。一角の背中から、血が噴き上がった。

一方、二番隊舎では隠密機動が動いていた。

「碎蜂隊長。瀨靈廷西区壱五参八番に旅禍を発見しました。現在、十一番隊の班目 一角が旅禍と戦闘中です。」

「班目か…頼りないな。私とその旅禍を追う。他は待機だ。」

碎蜂は部下の報告を受け、一角の加勢をするべく二番隊舎から消えた。

「はっ、はっ…はっ…！」

一角は背中に血を滲ませながらも戦意と本能で戦っていた。しかし旅禍の前では全く歯が立たず、更に体に傷を作る一方である。そして遂には膝を附いてしまった一角の首に、旅禍は刃の嶺を向けた。

「心配すんな。殺しはしねえ。どうやら卍解もまだ未熟らしいしな。名前を覚えてくれねえか、死神。」

旅禍は刀を鞘に仕舞った。

「…班目、一角だ。てめえ、何者だ？何でこっちに来た？」

一角が聞くと、旅禍は少し深呼吸をして答えた。

「俺の名は黒崎 一心。妹を助けに来た。」

一心は再び刀を引き抜き、その場を立ち去った。

c r i m s o n s e n i o r (前書き)

第五話です。正月やらで、投稿忘れてました…遂にオリキャラ登場です。が、ウザキヤラになりそうかな？と正直思ってます。後、オリ縛道、オリ道具…分かりにくいですが、どうぞよろしくです。感想が乏しいので、ホントによろしくー！！！！ですww

crimson senior

尸魂界。

碎蜂は現在、一心の僅かな霊圧を追っている。しかし、一心の存在を知っている者は極少人数で、総隊長も知り得ない。碎蜂が瞬歩で堀を走っていると、碎蜂の目の前に髪が紅に染まった少女が瞬時に現れた。

「ふふ、二番隊か：懐かしいなあ。」

（奴がもう一人の旅禍か：体格は小柄、か。体格は私と似ているな。いや、むしろ奴の方が小さいくらいだ。いや、そんな事じゃない！どうやった！？今の瞬歩、明らかに瞬歩の域を超えている！！もし奴の動きが鬼道によるものでは無く“ただの瞬歩”なら、尸魂界の誰よりも速い事になる…）

「貴様、旅禍だな。何者だ。」

碎蜂は、驚いた様子を隠し、話を切り出す事ではぐらかした。

「んーっとねえ、あなたの先輩かなあ。」

「先輩だと？冗談にしては情報量に欠けるな。この百余年、二番隊で隊長をしていたのは私と夜一樣だけだ。」

碎蜂は鞘から小刀を抜き取り、構えた。

「冗談はともかく、貴様等を捕えろと命が下されている。行くぞ。」
碎蜂の話が終わった瞬間には既に小刀が旅禍の背中に刺さっており、旅禍の動きが止まった。

「う……そ…。」

旅禍はそのまま動かなくなったが、碎蜂は旅禍の異変に気付き、距離を取った。旅禍の体に当たる空間が歪んでいるのだ。更に旅禍の体は歪み続け、旅禍の体は完全に一つの玉となった。

「…どういう、事だ。」

碎蜂の顔に汗が伝った。そして再び旅禍が瞬時に現れ、落ちて行く玉を掴んだ。

「どーゆー事って、二番隊隊長なのに分かんないの？コレだよ、コレ！」

碎蜂はその“コレ”が何なのか考えた。

「似靈丸か。」

似靈丸とは中が空洞の黒い玉で、靈圧を注ぎ込めば似靈丸が靈圧を感知してその人に似た分身を作る事ができる。技術開発局で製造されている。靈圧の消費が激しい為、護廷十三隊の中では判断力の高い二番隊隊長にのみ所持させている。

「何故貴様がそれを持っている！！それは二番隊隊長にのみ配布されている筈……」

「だーかーら、さっき言ったじゃん！あたしはあなたの先輩だって。」

旅禍の自信ありげな言葉に碎蜂は再び言い返す。

「ならば貴様は何時隊長になったと言うのだ！」

「あったじやーん。四楓院 夜一とあなたの間に空位がさあ。」

「まさか、あ後はずっと空位だった筈……その空位に貴様がいたと言うのか？」

「そだよーん♪でもあたし二日しか隊長やってないし、紹介される前だったから総隊長以外みんな知らないまま隊長辞めちゃった。あたし真央靈術院から一氣に隊長になったから、けっこう実力あるんだよ？」

碎蜂が気付いた時にはもう旅禍の手が碎蜂の肩の上に乗っていた。

碎蜂が慌てて振り返ると既に旅禍は消えていて、碎蜂の正面に旅禍がいた。

「縛道の六十一 六杖光牢。」

碎蜂は六本の光に捕われ、その瞬間に旅禍は碎蜂の前に現れた。

「破道の一 衝。」

旅禍の掌から衝撃が発し、碎蜂は飛ばされた。

（な、一番でこの威力だと！？）

碎蜂は捕われたまま壁に衝突した。

「縛道の六十二 百歩欄干。」

棒状の光が碎蜂の周りの壁に刺さり、碎蜂の細かい動きさえも制限された。

「今回は特別に縛道だけにしたげるよ。」

余裕を見せる旅禍に対し、碎蜂の顔には余裕が見られなかった。

「貴様、何故そこまで瞬歩が速い！鬼道か。」

「先輩に対して口の聞き方間違ってるって！てかあたし先輩だからあなたより速いに決まってんじゃない。」

当たり前かの様に旅禍は言う。

「そろそろ終わりにしようか！…滲み出る清楚の紋様 夢想なる佛の逸話 燃え盛り？肯定し？跨ぎ？輝き 眠りを促せる 沈み消え行く鉛の帝 堪えず荒れ狂う呪いの人形 拘束せよ 承諾せよ 天裂かれ 道理無きこそ運命なり 縛道の九十 白枢。」

旅禍が口上を言い終えると、白い霊棺が現れて碎蜂を包み込んだ。

「これであなたは自分の力じゃ出られないわ。残念だけど、そこで助けを待ってね。」

旅禍は紅の髪を風にそよがせ、瞬間的に消えた。

s l e e p i n g s u b j e c t a n d h e r p i n g i n v a d e r

第六話です。ずいぶん遅くなりました!! また変な設定増えましたが、よろしくです。アドバイスコメントも随時募集中です。すいません、これだけです。

一護は考えた。

死神の力は本当に必要か？ なったとして、俺に何の得がある？ ルキア達には義骸に入ってくれば会えるし、虚退治も石田やチャド、イモ山さんがいる。

嫌な予感が消えないが、大した事では無いだろうと思い、一護は眠りについた。

しかしそれは、大した事だった。

尸魂界。技術開発局。

研究材料保護の為、緊急隊首会から早く戻る事になったマユリは、技術開発局に帰って来た。

「おかえりなさいませ、マユリ様。黒崎 美寒の死覇装のデータデータを解析しておりました。死覇装自体の霊子一般の死神と差はありません。ですが、死覇装に付着した霊子が普通の霊子反応と異なる反応を示しました。恐らく現世、尸魂界、虚圏の全てを除く他の世界の者だと思われます。」

「成程、それは興味深いネ。明日解剖に入るヨ。器具を解剖室に運んでおくんだ、ネム。」

「了解しましたマユリ様。」

ネムの解析結果を聞き終えたマユリは、外からの異変に気付いた。

「…いるのは分かっているんだ。用があるんだったら扉を開けたまえヨ。」

マユリが言うと、誰かが扉を開けた。

「ここが技術開発局か。予想通り気持ち悪い空気だな。…良かったのか？ 旅禍を入れても。」

何と、入って来たのは旅禍である一心だった。

「構わんヨ。お前こそ良いのかネ？ここに来たら気分次第で実験材料にもなりかねないヨ。」

解剖の事を想像し、笑いが溢れるマユリに対し一心は周りを見渡し、葉漬けにされている美寒を見て一安心した。

「んなもんなんねえから大丈夫だ。美寒がまだ解剖されてなくて良かったぜ。美寒を返してくれねえか。」

「奇遇だネ。お前も死体を弄くる事に興味があるのかネ？」

一心の顔立ちからして研究者では無い事を知っていたが、少し挑発を仕掛けた。

「勝手に殺すなよ。美寒はまだ生きてる。もういいからさっさと美寒を返してくれ。」

「何だ、生きていると思っていたのかネ。残念だがこっちにはもう“死んだ”と研究結果が出ているんだ。」

「：話合いじゃ無理か。」

一心は刀を構えた。

「仕方が無い。実験材料にしてやろうかと思ったが、ミンチにするのも悪くない。直ぐに楽にさせてやるヨ。掻き筆れ 正殺地蔵。」

マユリの斬魄刀は金色の不思議な形と化した。一心は掌をマユリに向けた。

「破道の三十一 赤火砲。」

一心の掌から、赤い火の玉が発射された。しかしマユリはそれをものともせず、正殺地蔵で叩き落とした。すると一心はマユリの後ろを取っていた。

「破道の四 白雷。」

一心はマユリの背中に掌を当て、雷を放った。マユリはそれも避け、刀を振った。一心は一瞬にして距離を取った。

「近距離戦は苦手かネ？：私も、そう思っていた所だヨ！卅解 金色正殺地蔵。」

マユリの刀は芋虫の様な体をした巨大な赤子となった。

「やれ、正殺地蔵。」

マユリが命令すると、正殺地蔵は口から紫色の毒煙を大量に吐いた。

「縛道の八十一 断空。」

目の前に広がる毒煙を一心は一気に消し去った。

「まだだヨ!!」

今度は正殺し地蔵が一心に突っ込んで来た。一心は溜息を附いた。

「仕方ねえ。削ぎ落とせ ? 月。」

一心の斬魄刀が変化した。刀身は若干湾曲していて、長さは始解前の二倍近くはある。色は紅く、刀から漏れている霊圧も紅い。一心は突進してくる正殺地蔵を睨み、刀を翳した。

「月牙天衝。」

紅い霊圧によって、技術開発局が二つに裂けた。

瓦礫と化した技術開発局に佇む一心は、倒れて意識の無いマユリに言った。

「美寒は返してもらったぜ。後、一つ教えといてやる。美寒は死んだんじゃない。強度な“白伏状態”なだけだ。」

一心は刀片手に美寒を背負った。その一心の後ろ姿が、大切な人を護る為に戦ったあの時の一護の様だった。

破れた隊首羽織が、風に強く靡いた。

s l e e p i n g s u b j e c t a n d h e r p i n g i n v a d e r

これから投稿が遅れます。すいません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422p/>

刻印の世界～the markers dimension～

2011年10月8日05時04分発行